

## 2004年度卒業論文紹介

### 1. 片岡 知香

#### 派生構造から分析する非分離前つづりbe-

ドイツ語の特徴として、語の結合や前つづり・後つづりを用いた造語性の高さがある。中でも、非分離前つづりのbe-に着目して分析を行った。この論文は第1章から第5章まであり、最後に資料として、今回の分析に用いたbe-動詞（計903語）の派生構造の表を添付している。

まず複合動詞全体について述べる。分離前つづりには、アクセントが置かれる、主文内において定動詞となる場合は文末に置かれるなど、5つの特徴がある。また、その派生の過程から7つのタイプに分けることができる。例えば、an-, mit-, vor-などは、本来前置詞であったものが副詞的な前つづりとして用いられている。非分離前つづりには、アクセントがない、基礎語から分離しない、基礎語にいろんな意味を付加したり、結合価を変えたりするという特徴がある。さらに、7つの非分離前つづり (be-, ent-, er-, ge-, ver-, zer-, miß-) について、それぞれの前つづりが表す意味やニュアンス、機能についてまとめた。そして、非分離前つづりの中でも、互いに同義、あるいは反義であるものについて表にまとめた。例えば、be-とver-は、どちらも名詞に付加して「付与・添加」を表すが、これと反義であるのがent-であり、これは名詞に付加して「離脱・除去」を表す。さらに、その意味や用法によって、分離前つづりとして扱われたり、非分離前つづりとして扱われたりする前つづりがある。一般的に、原義的・空間的意味を保っている時は分離し、転義的・比喩的意味の時は分離しない（ただし、um-のみこれとは逆になる）。この分離・非分離の前つづりは、durch-, hinter-, über-, um-, unter-, voll-, wider-, wieder-の8つあり、それぞれ分離する場合と分離しない場合の意味についてまとめた。さらに、同一の分離・非分離の前つづりと基礎語から形成される動詞について、分離する場合と分離しない場合について、その意味を比較

した。例えば、*hintergehen*は、分離する場合は「後ろの方へ行く」、分離しない場合は「騙す、欺く」という意味になる。

さらに、非分離の前つづり *be-* に焦点を絞り、それが基礎語に与える意味やニュアンス、基礎語と結合価との関係に及ぼす影響について分析する。*be-* は、その形成の過程や、意味・機能に従って、ラテン語の *circum* (…の周りに) の意味であるもの、自動詞から他動詞を形成したり結合価を変更したりするもの、言葉遊びなどに用いられるもの、過去分詞のみで通用するものなど、7つのタイプに分類することができる。

そして、実際に辞典から、*be-* 動詞を抜き出し (計 903 語)、その抜き出した語の派生関係を遡り、それらがどのような派生の過程を辿っているかについて論じる。その際、*be-* 動詞を第1層、その前段階の語を第2層、以後第3層、第4層と続くこととする。最初に第2層がどのような品詞で構成されているか統計的に分析した後、第2層をなす品詞によって、どのような違いがあるのか分析する。第2層がそれぞれ、動詞であるものは、*be-* が自動詞から他動詞を作るのに非常に役立つことを表している。名詞であるものは、付与・被覆・状態・動作名詞・動作主・転義の6タイプに分けた結果、付与を意味するものが圧倒的に多かった。形容詞であるものは、その形容詞が表す状態にする (再帰表現の場合は形容詞の状態である) ことを表す動詞が多い。副詞であるものは非常に稀で、*begegnen* (出会う、出くわす; 応対する; 対処する) と *bejahen* (<…に対して> 然り <イエス> と答える) の2語しかなかった。そして、第2層のない動詞であるが、これは903語中16語であった。これには、基礎語が現在では消滅してしまったもの、現代の言語感覚では遡る事が出来ないもの、方言など特定の範囲内で用いられるもの、以上の3タイプがある。最後に、派生の段階の全てを通して、どのような構造が多いのかを統計的に分析した結果、動詞と *be-* が結合してできるものよりも、名詞から *be-* のない動詞が派生し、そこから *be-* のある動詞が派生したものが最も多い (272 語) ことが意外だった。

今回、903語もの *be-* 動詞について、その派生構造を追うことによって、辞書などに書かれている以上の意味や機能を知ることができた。また、今までは知らなかった *be-* の由来を知り、そこからの意味・機能の転じ方を調べることによって、今まで以上に非分離前つづりに対する理解が深

まった。しかし、今回語の派生を遡ることに時間を費やしすぎてしまい、折角調べた構造を十分に活用出来なかった。また、他の非分離前つづりも同様に分析すれば、より理解を深めることができるだろう。

## 2. 梶川裕子

リルケ『マルテの手記について』

—苦悩は賞賛すべき人生の一部である—

文学作品のなかには、「生」「死」「愛」を取り扱ったものが多い。それは、いつの時代にもいかなる立場の人間にも、それらのテーマは目に見えないものであるのに、普遍的な人間の課題であり続けたからだろう。小説『マルテの手記』（以下『手記』）にも、それらのテーマについての描写が出てくる。『手記』が書かれてから一世紀が経っているのにも関わらず、現代に生きる私たちでさえ感じるリルケの魅力とは何なのだろうか。そして、リルケはこの作品を通して私たちに何を伝えたかったのだろうか。

『手記』のあらすじは、マルテという若いデンマークの無名の詩人が、死の大都会であるパリに住む。そのパリにおける孤独と絶望の生活の中で、人知れず、ひそかに書き溜めた手記という形式を取っている。『手記』は、前、後半に分かれ、大小 71 のパラグラフからなる日記小説で、六年間にわたって書き継がれた。難解で、複雑、不規則な作品、死や愛や、彷徨を余儀なくされる人間の状況についての、一連の体験された場面、思い出、挿話から成る。これらの中で、不幸な主人公マルテは生を理解しようとする。この作品は、自身の心を赤裸にすることを余儀なくされた詩人リルケの告白をも表しているのである。

次に、リルケの生涯と生きた時代背景の概要を述べた上で、作品の中から「パリにおける孤独と見ること」「マルテの幼年時代」「死」「愛」「マルテと蕩児」というテーマを選んで述べた。ここでは、「死」と「愛」というテーマについて触れたいと思う。

『手記』の大部分は、マルテの親近者の死を始めとして、有名な歴史上の人物の最期の様子などが描かれており、「死」の主題で貫かれている。

これらは他人の死であるが、これが自分にも跳ね返ってきたとき、自分の身にもやがて起こる絶対不可避の死として、マルテはこの恐るべき死を引き受けねばならなかったのである。そして、『手記』の冒頭では、パリにおける「大量生産の死」と「固有の死」との比較がなされている。マルテは、パリで恐るべき「大量生産の死」を見る。「大量生産の死」とは、大量生産下の現代社会に生きている大衆の死のことである。そのことをリルケは『手記』の中でこう言い表している。「[...]ああ、何もかもが揃っている。この世に生まれてきて、仕上がった生を見つけ出し、ただそれを身につけさえすればよいのだ。[...]そして、この世に生まれてきたのと同じように死んでいく。人々は自分の病気に付属した死を死んでいく。」しかし、死は病気に付属しているものでもなければ、サナトリウムに備え付けられているものでもない。死は自分に属しているのである。それが、「固有の死」を持つという考えなのである。「固有の死」の例として、マルテの父方の祖父侍従職ブリッゲと母方の祖父ブラーエ伯を挙げている。

もはや存在しないこと、もはや生きないこと、このことはやがて起こる不可避の恐るべき事実である。その死をたとえ自分自身の死としたとしても、その死に対する不安は大きい。しかし、この自分自身の死を持つことによって、人が決して守られていないということを知るならば、自己を本来の自己にまで高め、自分自身の生を充実させようとするに違いない。この点で、自分自身の死は実存への契機としての意味を持つのである。

次に、リルケの愛は芸術家の創造行為と同じと見なされている。つまり、芸術家は芸術事物を客体（主体性を失った状態）として見なさず、芸術家、芸術事物がそれぞれ主体として存在する。そのような相互主体の関係で結ばれた時、芸術家は存在を超越することができる。そのような主体性を持って愛すること（「相互主体間の愛」）がリルケの目指す愛なのである。ここで、「相互主体間の愛」を成立させるには、「所有」「孤独」「忍耐」が必要になるのである。リルケのいう真の所有とは、現実界での喪失を伴わない所有で、完全に孤独になった者のみに可能となる実在界での所有のことである。つまり相手を「持つ」(haben)のではなく、相互に「在る」(sein)関係に基づいているのである。そして、ヴェニス

のサロンでの歌に見られるように、私たちによって所有されることがなかった人、その人は日常の現実界において如何なる所有関係をも結ぶことがなかったからこそ、喪失を知らず、ただ実在界における「真の所有」のみを知っているのである。そのような人の所有は現実界における喪失を意味するのではなく、なるほど死去によって「立ち去る」(fortgehen)にしても、その人は実在界において「持続する」(fortgehen)のであって、その人の真の所有は死去によってもいささかの変更も加えられないのである。そして、お互いが相互に主体であるためには、「互いに離れること」が必要になってくるのである。ここに、リルケの孤独は強く要求されてくるのである。しかし、この「孤独」は見捨てられた孤独(Einsamkeit)ではなく、見捨てる孤独なのであり、自ら求めた独居(Alleinsein)の意味である。

『手記』は、一見ネガティブに思えるような描写が多く、全体的に暗い印象を受ける。それにもかかわらず、その描写のベースには「生きること」に対する賛美が感じられるのである。リルケは「悲しみを浪費するな。われわれに与えられている苦しみを、君たちはなぜ麻酔剤で紛らすのか。そこにこそ、人間の本体に迫る手がかりが与えられているのである。いな、悲痛や苦悩は人間の本拠である」と言う。そして、マルテのようにどんなに孤独と絶望と貧しさの中にあっても、そこには、まだ偉大な精神が人間生活と結びついているのである。そしてその精神は、そのまま「生の賛美」に繋がるということが、リルケが『手記』を通して私たちに伝えたかったことではないのだろうか。

### 3. 岡田 夕希子

#### 『モモ』の中で描かれる「時間」の概念 — 生と死、そして輪廻 —

この論文ではミヒャエル・エンデ (Michael Ende) 著『モモ』 („Momo“, 1973) の中で描かれる時間概念について研究した。この作品は児童文学として著名な作品で、物語自体はとても易しい文章で描かれている。しかしその物語を読んでいくと、哲学的ともいえるその世界の深さに誰もがはっとするだろう。彼の描く時間の広がりには果てしなく、それは宇宙まで広がっている。モモとマイスター・ホラとの出会いの中で繰り広げられる〈時間の花〉の場面では、自分の時間の中に宇宙が存在し、自分自身がその中で生きている—というひとつの理をはっきりと感じ取ることができた。私は彼の描く時間の果てしない広がりには大きな衝撃を受け、この時間概念をテーマとした。時間とは何か、そして過去・現在・未来と自分のつながりとは何なのか。このテーマを紐解くにあたって私が使ったツールは、シュタイナー<sup>(注)</sup>の思想である。エンデという人間を知る上で、シュタイナー思想はとても重要な要素であり、その思想は『モモ』の中のいたるところで垣間見ることができる。このシュタイナー思想をもとに、『モモ』を紐解いていく。

時間の花における考察では、まず時間をつかさどるマイスター・ホラという人物の存在について考えた。「人間は、物質 (Leib) ・魂 (Seele) ・精神 (Geist) の、三つの要素から成り立っている」というシュタイナーの考えを前提に読んでいくと、マイスター・ホラは〈死〉そのものである—という考えにたどり着く。時間をつかさどる者が〈死〉であるということは、〈死〉は私たちの恐れる〈全ての終わり〉ではなく、〈時間そのものを生み出す、時間 (生) の原点〉であることが分かる。この〈死〉は、生を送り出す〈死〉である。ここでは、死の中に命の萌芽がある—という生と死の永遠の営みを見事に表している。

次に時間の花について考察を進めた。この〈時間の花〉は、二つの理を同時に表している。ひとつは、今私たちが生き、生活していく中の時間、その一瞬一瞬を意味している。もうひとつは、人間の生まれ変わり—輪廻転生を意味している。私たちは生活していく中で、普通〈時間

のひとつひとつ〉を意識する事は無い。時間は、秒、分、日、月、年というように、常に当たり前のよう存在しており、過去から現在、現在から未来へと結ばれるまっすぐな直線のように存在している…と感じているのではないだろうか。しかしこの時間の花に描かれている時間はそれとは違う。これらの花ひとつひとつが咲き、また散る—エンデはこの表現によって、時がひとつひとつの存在としてあり、それらの時は過ぎればもう二度と戻ってくることはない、唯一の存在であるということを表している。そしてもうひとつは、人間の生の輪廻である。シュタイナーの考えに輪廻がある。ひとつひとつの花が全てモモの花であるならば、「私達は死を通過し、音となり、また新たな生がはじまる」というマイスター・ホラの言っていることがよく分かる。咲くたびにそれぞれ違った唯一無比の花が、ひとつひとつの新たな生であることを描いているのである。この時間の花の描写は、ひとつの花が私たちの生活の一瞬一瞬である事を表すのと同時に、花をひとつの生として、それぞれの生が繰り返し行なわれている輪廻を見事に描いている。

次にこの花が„Blume“ではなく„Blüte“（樹木の花）であることに注目した。なぜエンデは時間の花を„Blüte“として描いたのか。それは、これらの花がひとつの原点から生まれているということ—つまり花が枯れ、また新しい別の花が咲いたとしても、それは同じひとつの木から生まれるものであり、根本は同じであること—を表したかったからではないだろうか。ではこの根本とは何か。それは人間の核、すなわち〈自我〉である。人間はあらゆる生を送っていく中で、少しずつ命の樹（自我）を成長させ、年輪を刻み、時間という美しい花を咲かせていたのだ。

これらの考察から、エンデの描く時間概念の中核にあるものは、生きることによって得る〈自我の成長〉であることが分かった。つまり、エンデの描く時間とは〈命〉そのものである。時間とは、それ自体がはじめから存在しているのではない。人間が自分の存在を認識して、はじめて存在しうるものなのである。

(注) シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) ドイツの思想家。独自の人智学を提唱し、芸術・教育などの多分野で活動。オルターナティブ運動の先駆。シュタイナー主義の学校で著名。

#### 4. 吉岡 理一郎

ドイツ語の冠詞って何？

—ドイツ語初学者が『DUDEN BABD 4』を読んで—

以前から私はドイツ語学習者にとって聖書と言われている『DUDEN』の4巻をじっくり読んでみたいと思っていたのですが、初学者の私にとってそれを読解するにはドイツ語で書かれた内容を先ず和訳する事から始めなければならず、それは到底、一朝一夕に出来るものではありませんでした。そこでこの際、私が今まで学習してきたドイツ語の拙い知識を総動員して「ドゥーデン文法」の原文を自分なりに読んで理解する作業を私の大学四年間のドイツ語学習の総まとめとして位置づけ、その学習成果を表現する場を当該卒業論文でと考え、ドイツ語文法という漠然とした広い分野から日本語にはない品詞である「冠詞」を選択し、それは私にとって独作文等をする際によく解らないものの一つでもありましたので、向学のためにも、今般の卒業論文のテーマに取り上げました。この様な動機ですから、参考文献等を広範化させず『DUDEN』の「冠詞」章に限定して、その中で「冠詞ってどの様な特徴を持っていてどの様に使われているのか？」を自分なりに理解することを目標とし、また当該論文作成に際して、ドイツ語初学者である私の稚拙な基礎知識をもって与件とし、出来るだけ原文の表現に沿いつつも語を補って解り易く—自分ではそう思って—和訳することと、内容が貧困なればせめて見易い紙面構成にすることなどを心掛けました。ですから、恥ずかしながら本当に「論文」と言うよりもただ「ドイツ語文書の単なる和訳文」という方がいみじくも言い得ています。しかし、書かれている内容を理解する際に、それぞれの事項や例文等に対して行った自分なりの考察や推測した内容も適宜付加致しましたので、これが唯一、不肖、私の意見や考えの論述になっているかもしれません。

『DUDEN』の「冠詞」章の内容としましては「冠詞の種類と特徴」、「冠詞の用法」、「冠詞の融合形」などドイツ語既習者なら目新しさを感じない当たり前の内容ばかりなのですが、どっこい、その内容を熟読することで希薄ながらも私が持っていた冠詞知識に対する裏付けや曖昧さの方向修正等が出来るなど再認識する事も多くありました。印象的な内



容を二三挙げますと、他の文法書では名詞の前に冠詞が無い形態を全て「ゼロ冠詞」として一つの枠で表現している場合がありますが、『DUDEN』の著者は不定冠詞の複数形を「冠詞のゼロ形式」、冠詞自体を伴わない名詞形態を「無冠詞形」として表現し、その両者は厳格に区別されなければならないとしています。少し変わったところでは、形態的に眺めた冠詞の曲用について、不定冠詞は語幹と語尾に区別可能で、その語尾が「性」「数」「格」の形態素であるとしています。定冠詞は語尾と語幹に区別する事が出来ないで、その定冠詞の形全体が形態素であるとしています。さて、冠詞を扱う上での難解なものとして「冠詞用法」があります。冠詞用法は「拘束されない用法」と「固定された用法」に区別され、後者は冠詞選択の余地が無く統語的結合や慣用的言い回しによって冠詞形が既に決まっている用法です。対して前者は会話者等の意図によって自由な選択が可能で、この場合に難しさが現れます。それはこの自由選択において特に発話対象の名詞が一般化された意味合いにある場合で、結論から言いますと「定冠詞」「不定冠詞」「無冠詞」のいずれでも可能なのですが、その対象の意味することが概念的に共通する部類の場合、性質的に共通する部類の場合、ある部類の例示的代表の場合、上位分類される場合など、何を基準にしてその対象である名詞の意味を表現するかによって選択され、厳密に言えば選択の違いが生じて当然なのでしょうが、私には母語話者の語感による部分が多いように感じます。そこでこの複雑そうな冠詞選択について少しでも判りやすい様を一覧表のような「冠詞選択フローチャート」を作成しました。

また、形態的に見る冠詞は言外の意味として「性」「数」「格」を示すと言われていますが、テキスト内において冠詞単独で「性」「数」を意識することは少なく、何故なら「性」は名詞毎に決まっておき冠詞に「性」の概念がないからです。「数」の明示は名詞の複数語尾によるところが多く、不定冠詞は単数形だけしかありませんし、定冠詞の単数形と複数形の間には全て同一形態のものがあり冠詞単体では識別が困難だからです。しかし「格」においても確かに同一形態のものがありますが、テキスト内での語順などとも相まって比較的「格」の細分化がなされていません。

このように『DUDEN』を読解し冠詞についての理解を深める作業を

したのが私の卒業論文です。